



知恩院の忘れ傘

はじめに

京都市東山区にある浄土宗総本山の知恩院には、うぐいす張りの廊下や、大杓子、抜け雀などという七不思議が伝わります。その一つに数えられる御影堂の忘れ傘について、知恩院のホームページでは次のように説明されています。



知恩院御影堂(京都市東山区 写真提供:浄土宗総本山知恩院)

なつた傘がみえます。当時の名工、左甚五郎が魔除けのために置いていったという説と、知恩院第32世の雄誉霊巖上人が御影堂を建立するとき、このあたりに住んでいた白狐が、自分の棲居がなくなるので霊巖上人に新しい棲居をつくってほしいと依頼し、それが出来たお礼にこの傘を置いて知恩院を守ることを約束したという説とが伝えられています。

いづれにしても傘は雨が降るときにさすもので、水と関係があるので火災から守るものとして今日も信じられています。

ただし、実際のところ傘が何のために置かれたのかについては、わかっていません。

桐生の守り刀

私が群馬県の桐生を旅し、ある旧家の蔵を案内していただいたお礼、棟柱に棟札と守り刀を置いたという話を聞かせていただきました。そのおりに、ふと知恩院の忘れ傘も、桐生の守り刀と同様になんらかの呪物として置かれたのではないかと考え、いろいろと文献を調べてみたのですが、傘を天井裏に祀るような習俗を

見出すことができませんでした。

厄払いとして

ただ、ひとつ。ウエブサイトで公開されているミツカンの機関誌『水の文化』50号には、株式会社福井洋傘の代表取締役社長橋本肇氏の次のような話が掲載されています。

「嫁入り道具でもたせる傘には、親が娘を嫁がせるときに『どうかこの子を守ってください』と思いを込めるので、霊力がとても強い。昔は使われなくなった蛇の目傘を、厄除けとして天井裏に上げたそうなんです。江戸時代初期の伝説的な彫刻職人、左甚五郎が魔除けのために置いたと伝わる『知恩院の忘れ傘』も同じ意味合いでしょう。今でも宮大工に家を建ててもらうと、床柱に傘を1本くくりつけるそうです。」

呪物としての傘の意味

傘が持つ厄払いという力について、例えば堀口利枝氏等の研究論文『絵巻物に描かれた傘の意匠』では、「傘は、尊きもの・高きものを覆い、その元に尊き空

なればならない建物だということです。なぜなら、酒蔵については、もともと日本酒は、それぞれの蔵に住み着いていた独自の「蔵つき酵母」によつて、酒を醸していたからです。知恩院については言わずもがなだと思います。

それらの建物で傘が置かれていた意味とは何か。しかも、その2例のほか事例がないのはなぜなのか。私はやはり傘本来の雨除けを念頭において、古来の習俗というよりも建築を手がけた大工が、ごく私的に雨漏り除けの願いを込めて置いたものだと考えています。

先に、火伏の呪いは水気のあるものが呪物となったと紹介しましたが、水は火事を防ぐ一方で、建築の存続を阻む雨漏りをもたらす原因ともなります。

雨漏りがいかに建築を損なう原因となるのか。そのことを端的に示すのが、岡

閑谷学校の雨仕舞

閑谷学校講堂(岡山県備前市 2018年撮影)



閑谷学校講堂(岡山県備前市 2018年撮影)

間・高き空間を創生する役割を担っていた。この意味において、傘は1つの結果を織りなすものであったといえる。」などと説明されており、他にも類似の論考が見られることから、そのような役割を知恩院の忘れ傘も期待されていたのかもしれない。

ただし、北陸地方の建築儀礼に関する報告書をもみても、そうした事例が全くないことが気にかかります。

婚礼の傘

橋本氏の談話には「嫁入り道具でもたせる傘」という話がでてきますが、私が調べた限り、民俗儀礼において傘に関する報告があったのは、まさに婚礼におけるものでした。

三重県亀山市では、「傘や下駄は結納品ではなく、従来は嫁入り当日に仲人が嫁を迎えに行った時に渡したものだ」という考えが紹介されています。

しかし、傘が用いられる最も多くの報告は、嫁が婚方の家に入る「入家式」の時のことでした。例えば東京都板橋区では次のように紹介されています。



閑谷学校山門の屋根の軒先につけられた排水パイプ(瓦の下の黒い穴)

山県にある閑谷学校の雨仕舞です。閑谷学校は、池田光政の命によって建てられた、日本初の藩営庶民教育施設であり、300年以上たった今でも現役の教育施設として運営されています。

光政は閑谷学校の永続を心より願ったことから、建築については徹底した雨仕舞が施されていました。なかでも屋根構造は、柿葺・板葺・瓦葺と重ねる三重構造とし、板の合わせ目など隙間を漆で固めて周到な防水対策が施されています。それでも万一、屋根内に水が溜まった場合を想定して、各瓦の列ごとの軒先に陶管の排水パイプも設置されており、現代の建築関係者を驚愕させたといえます。

おわりに

火災は大工にとっては、不可抗力の災いであり、自分たちの力では如何ともしがたいはずで、神頼みの火伏の呪いを伝えてきたのだと思います。しかし、雨漏りについては、大工はその恐ろしさを熟知しながらも、自分の仕事への矜持も、おっぴらに呪いを施すことはできなかったのではないのでしょうか。

知恩院の忘れ傘は、そうした大工たちの一人が、ひそかに願った呪物だったのであるのか。そういった意味では、左甚五郎が忘れたという伝説も、ある意味事実を表しているのかもしれない。

(文:江口秀)

「婚の家の前に到着すると嫁の仲人(女性)が傘をさし、嫁を覆いながらカイド(家屋に通じる路)を進んでいく。行列の代表者が到着の口上を述べる。カイドの両脇には松明がともされ、親戚、近隣の人たちが出迎えに集まっている。そうしたなか嫁はそれまではいてきた履物を足駄に履きかえ、家屋へと向かっていく。家屋は勝手口から入るものとされている。」

ただし、このような事例は「傘」よりも「笠」を用いる方が多く、横浜市の『港北区史』の執筆者は、「今では蛇の目の傘が多いが、古くはこういう笠であったのではないだろうか」と推測しており、私も同じように考えています。

建前の後の魔除け

なぜならば、建築儀礼においても「傘」ではなく「笠」が用いられているからです。それは、建前が終わった後に、人の住むまで空き家になるので、先に天狗が入らぬようにと、塩鯖や笠パンドリ(糞)を下げておいたというもので、石川県での事例が紹介されています。

軒の呪物か

ところで、忘れ傘が置かれている軒は、かつて家と外部を遮る結果と考えられていました。野本寛一氏の『軒端の民俗学』によれば、軒は「屋根の下でありながら『うち』ではなく、限りなく『うち』に近い『そと』であった。軒は、こうした空間的宿命を負うゆえに、『うち』と『そと』の緩衝の場となり、対決の場ともなつた」とされ、さまざまな呪物で守られることになりましたが、ニンニクやイセエビの殻、猿

の手首、鎌など種々ある呪物の中にも傘は見当たりませんでした。

火伏の呪いか

知恩院のホームページでも紹介された火伏の呪いという説について考えると、木造建築には火事が大敵であり、さまざまな呪いが施されていたことが報告されています。

例えば「落雷による火災を防ぐため雷の落ちた『あまり木』を小屋組のどこかに使う」「みずのき(水木)を棟木に使う」と火災に遭わぬ。「棟や妻壁などに水の字があると火事にならない」。大棟の両端に鴟吻というシャチホコのような飾りをつけ、「鴟吻は海獣で水の精とされ、火から屋敷を守るために置かれた」などと、このように多くは水に関連するものが屋根や柱に取り付けられました。

一方、傘はいえ、水気をおびたものというよりも、水(雨)を遮るものなので、火伏の呪いかといえ、すなおに首肯できません。もちろん、傘を火伏に用いたという報告もありませんでした。

傘本来の役割

このように考えあぐねていたお礼、テレビのある番組で京都府伊根町の酒蔵が紹介され、その江戸中期から残っている店舗の天井からは、桁や梁のような構造材とは別に、細い木材が2列にわたってあり、そこに番傘がせられていたのを偶然目にしました。店主もいつから、何のために置かれたのか分からないとのこと、私は忘れ傘と重なるものを感じました。

知恩院と酒蔵が共通することは、100年も200年も長久に存続させ

※ 足駄:雨の日などに履く、高い歯の下駄